

# 子ども学会議 大会推進委員長から

I

## 第2回日本子ども学会議（2005年9月3日・4日開催） テーマ：多文化社会と子どもたち

東京大学大学院 医学系研究科教授  
**牛島 廣治氏**

第2回子ども学会議（日本子ども学会学術集会）は、「多文化社会と子どもたち——未来をつくる共生と支援——」のテーマのもと、2005年9月3日・4日の両日、東京大学本郷キャンパスで行われました。

21世紀になり、わが国はますます多文化社会となりました。多くの国籍の人々が生活する中で、子どもの教育と保健・福祉は重要な課題であり、共生と支援が必要です。また同時に、私たちも多くの国籍の子どもたちから活力をもらう必要があります。

今回の学術集会では、まず「多文化に生きる子どもたち」の演題で基調講演をいただき、特別講演「脳科学と言語」では、コミュニケーションとしての言語や、第二言語の習得と失語の面などからお話しいただきます。続いて「文化間移動と子どもの発達」と題したシンポジウムが行われます。ここでは、違った文化を経験する子どもが話題となります。さらに2日目のシンポジウムは「在日外国人の子どもの現状と支援」をテーマに行われます。

遠い昔になりますが、私も家族とともに、米国で留学生活をしたことがあります。2年余の短い期間でしたが、異文化の経験をしました。その間、現地で米国国籍を取得して生活する日本人や、日本の会社・大学から来られた人々と仲良くなる一方、米国人・他の国から来た方々との交流も経験しました。その頃のことが、今でも鮮やかに思い出されます。

帰国後は、国際間のウイルス感染症や子どもの感染症を中心とした研究を国際協力のもとで行ってきました。10年前に東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻に赴任してからは、社会学系では主にアジアの少数民族の子どもたちの健康を、実験系ではアジアを中心としたウイルス感染症を扱っております。そこではアジアの国々からの大学院生が研究をしており、その活力が大きな力となっております。

また、社会学的な研究では、タイでHIV感染を持つ主婦の自助組織システムの構築に関する介入型の研究、ベトナム・ラオスの少数民族の子どもの研究、中国雲南省の少数民族の子どもの健康に関する介入型研究、中国雲南省での鉛汚染と母子の健康の研究、北京での子どもの肥満の研究、アジアでの母乳哺育率とその要因に関する研究などをを行っていま

す。今後も継続的に行う課題であり、少しでも役に立てればと思っております。

今回と関連した一連の学会としては、次のようなものを開催させていただきました。2001年9月の第16回日本母乳育育学会「母乳育育の国際間の比較」、2004年2月の第19回日本国際保健医療学会東日本地方会「国際母子保健——特に少数民族の母子保健において——」、2004年11月の第36回日本小児感染症学会総会「小児感染症の国際化と国際協力」です。また2005年11月の第20回日本国際保健医療学会では、「母子保健と人権」というタイトルでワークショップをさせていただきます。

なお、2001年から2004年にかけては、厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究）「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」を行いました。

この研究では、地方自治体、NGO、在日外国人のなかでのリーダーシップをとる方の存在と、理念と活動が重要なことがわかりました。さらに在日外国人の親がずっと日本にいるのか、母国に帰るのかなど、将来を見据えた生活設計が必要なことがわかりました。残念ながら、引き続いての研究については補助金が得られませんでしたが、重要な課題として今後も地道に行っていきたいと思っております。内容の詳細は <http://square.umin.ac.jp/boshiken/> で見ることが可能です。

在日外国人の現実の生活は、困難なことが多いと思います。わが国で生活するすべての人たちが課題を解決するには、限られた予算・人・時間の中で、効率的にことを行うための英知と努力が必要だと思います。特にわが国の未来をつくる子どもの教育・健康・福祉は、国籍にかかわらず、どうあるべきかという明確な将来像を描いて、目先のことには振り回されず、普遍的なあり方を求める必要があるように思います。

「日本こども学会」は発足したばかりの学会で、まだまだ流動的なところもありますが、目的に賛同する方々が自らの体験・研究を持ち合い、少しでも新しいことが得られ、またお互いの交流ができ、次のステップ・アップに繋がればと期待しております。

# 子ども学会議 大会推進委員長から

II

第3回日本子ども学会議（2006年秋開催予定）

テーマ：「子ども学」の未来を考えよう

甲南女子大学 人間科学部教授 国際子ども学研究センター所長  
**稻垣 由子氏**

第3回日本子ども学会議は、平成18年に甲南女子大学にて開催いたします。テーマは「子ども学の未来を考えよう」といたしました。

甲南女子大学では、平成8年に学会長の小林登先生が「子ども学」講座を開設され、平成10年には「国際子ども学研究センター」が設立されました。同センターは、子どもに関するさまざまな研究者が領域を超えて研究成果を共有できる場としての役割を果たしてまいりました。そして、その役割が全国に広がり、平成15年には「日本子ども学会」も誕生いたしました。

甲南女子大学では、平成18年4月より、現在の人間教育学科を改組し、いよいよ「総合子ども学科」としてスタートさせることになりましたが、このような時期にこの学会を開催させていただくことを大変榮誉に感じております。

「子ども学」は全国的にも認知が広がり、多くの大学に「子ども学」に関する講座が誕生し始めています。内容を概観してみると、従来の保育学科や幼児教育学科をはじめ、心理学科や育児学科など、さまざまな教科や教育内容が見られます。

今後「子ども学」というコンセプトのもとに、教育内容に関して関心のある者が一堂に会して議論を深め、その内容について共有ができるべと考えております。そこでそれぞれの立場を超えて、「子ども学」の未来に必要なカリキュラムまでも示すことが可能となれば、厚生労働省・文部科学省という行政的区分を超えた文理融合学としての姿を提言できるのではないかでしょうか。

第3回子ども学会議のプログラムはまだ思案中ですが、現在興隆しつつある「子ども学」という学問を、さらに発展させるための方向を示すことができると願っております。子ども学の未来のために、皆様方のお力を借りしながら学会を盛り上げていきたいと考えております。

神戸は平成7年の「阪神淡路大震災」後、地域の力で復興してまいりました。子どもが健やかに育つためには、地域の力は何よりも大切なものと言えるだけに、神戸で第3回子ども学会議を開催することの意義を改めて感じております。

●甲南女子大学 国際子ども学研究センター  
<http://www.crn.or.jp/KONANWU/index.html>

国際子ども学研究センターは「子ども」に関するさまざまな研究者が、領域を超えて研究成果を共有できる場所として、1998年に設立されました。「子どもは生物学的存在として生まれ、社会学的存在として育つ」ことを原点に、子どもに関する学問を取り込んで統合し、子どもが豊かにいきいきと育つ方法を探求していきます。同センターは、「子ども」に関する研究、実践活動を行っている講師を国内外から迎えて、公開フォーラムとして講義を行い、その内容を「子ども学」の研究機関誌としてまとめています。2005年度までに研究誌『子ども学』は7巻が発行されています。

●甲南女子大学 総合子ども学科  
<http://www.konan-wu.ac.jp/guide/gakka/ningen/child/index.html>

現在の子どもたちは、複雑で多様な問題に直面しています。これらの問題を解決するには、さまざまな分野の専門家が共通の場で話し合うことが必要です。「子ども学」はそのような分野を超えた「子ども」研究の基盤となる学問です。

2006年4月、総合的な子ども研究の拠点として、甲南女子大学に「総合子ども学科」が誕生します。総合子ども学科は、子どもを取り巻く問題の発見と解決という視点から、実践的、より学際的に構成されています。

学科の「総合」には、3つの意味があります。すなわち、[1] 医学、教育学、心理学、社会学、哲学、情報論といった従来の学問領域を超えて、子どもの問題を総合的に学ぶ「学際的総合性」、[2] 子ども学系（子ども学・保育・幼稚園教育）と人間教育学系（人間および教育諸科学）の2つの教育プログラムを総合して学ぶ「総合一体性」、[3] 高度な乳幼児保育と幼児教育の専門化育成をめざして、大学院との相互連携を強化することの3点です。

# 子ども学会議 大会推進委員長から

III

## 第4回日本子ども学会議（2007年秋開催予定） テーマ：生命科学と子ども

慶應義塾大学 文学部教授  
**安藤 寿康氏**

まだしばらく先の話ですが、2007年の「日本子ども学会議」を、慶應義塾大学でお引き受けする予定になっています。テーマは今のところ「生命科学と子ども」を考えています。しかし、正式なテーマ名は変わるかもしれません。生命科学は今ものすごい勢いで発展しており、テーマを決める時には、もっと絞られたものにした方がよくなるかもしれないからです。

「生命科学」と聞いて、みなさんはどうな印象を持たれるでしょう。昔からなされてきた生物学や医学は、もちろん今でも生命科学の重要な柱です。しかし、その中でも特に新しい分野の発展がめざましくなってきました。たとえば、バイオテクノロジーを用いて新しい食材の品種や治療に役立つ薬などが作られるようになりました。遺伝子治療はこれまで治らなかった病気の治療を可能にしています。ヒトゲノムプロジェクトは、2003年に人間のDNA配列をすべて読みとったことを宣言しました。今、その情報をを利用して、いろいろな病気に関係する遺伝子を探そうとしています。

これらは主に遺伝子に関連して発達してきた生命科学ですが、それだけではありません。最近の脳科学の発達にもめざましいものがあります。fMRI(ファンクショナルMRI,機能的磁気共鳴画像)、NIRS(Near Infrared Spectroscopy近赤外線分光法、あるいは光トポグラフィー)などの機械を用いて、あらゆる精神活動をつかさどる脳の働きを、脳を開いたり傷つけたりせずに測定できるようになってきました。

こうした生命の根幹に関わる技術と学問的成果をもたらす生命科学は、生命力のかたまりである子どもを理解し、その健やかな成長に関わる上で、これからどんどん重要になっていくと考えられます。実際、そのような領域に関心をもつ研究者や教育実践に関わる人たちが、少しずつ増え始めています。

そもそも「日本子ども学会」は、小児科の先生、脳科学の先生、進化心理学の先生など、生命科学に関わりの深い先生たちが中心となって作られたものです。今年の子ども学会議は「多文化社会と子ども」がテーマですが、その重要なテーマに言語の獲得の問題がありますので、初日の午前中には「脳科学と言語」というタイトルで特別講演が行われます。

私が司会を務めさせていただいて、東京大学助教授の酒井邦嘉先生に「第二言語習得と子どもの脳」、東京女子医科大学教授の岩田誠先生に「言葉を失う脳」というタイトルでお話をいただき、そのあとパネルディスカッションを行います。これは、

いわば来たる慶應大学での会議の「前(々)夜祭」とでも呼べるものです。

脳科学と遺伝学は、生命科学と子どもの問題を考える上での柱の学問となることが予想されます。私は今、科学技術振興機構(JST)の「脳科学と教育」というプログラムの一環として、「首都圏ふたごプロジェクト」という研究を、多くの仲間と一緒に行っています。子どもの健やかな成長に関わる社会的・教育的環境をどのように作ればいいのか。この問題は、従来は教育学者、社会学者のテーマでした。しかし、人は一人ひとり、遺伝的資質から違います。この遺伝要因を考えずに、教育について考えることはできません。これまで教育の中で遺伝にふれることはタブー視されてきましたが、ふたごによる大規模で発達的な調査は、遺伝子が成長の中で環境と絡まって働くダイナミックで柔軟なプロセスを明らかにしていってくれることでしょう。

このプロジェクトの中では、NIRSを用いて、赤ちゃんがお母さんの言葉をどう受け止めているか、歌とお話を区別しているかなどについての研究を計画しています。2007年の大会の頃には、きっと何らかの成果が出てきているものと期待しています。

こうした「脳科学と教育」というテーマは、今、世界中で着目されており、OECDやローマ法王庁科学アカデミーなども、その研究の推進に強い関心を寄せています。私は7月15日から21日まで、イタリア・シチリア島のエリーゼという歴史のある町で行われた「心・脳・教育」という国際会議に参加してまいりました。この会議には、JSTの「脳科学と教育」の統括をされる小泉秀明先生や「日本子ども学会」でおなじみの進化生物学の佐倉統先生らとご一緒させていただきましたが、世界のさまざまな取り組みに大いに刺激を受けました。ドイツやアルゼンチンでは、脳機能の測定を学校の中にまで持ち込む試みがなされていました。イギリスでは、失読症がどのようにして起るのかについて、心理学と脳科学が合わさった研究が盛んに行われ、そこでは小山麻紀さんという日本の研究者も大活躍でした。知能の遺伝子研究をどのように教育の問題と結びつけるかについての議論も始まりつつありました。これらはまだ芽生えの段階で、第4回の子ども学会議の時にどこまで発展しているのか、今からわくわくする気持ちです。

どうぞご期待ください。